

令和 元年 5 月 31 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02149

研究課題名(和文)現代フランス現象学に関する日仏共同研究の試み

研究課題名(英文)Essay at Franco-Japanese joint Research on the French contemporary Phenomenology

研究代表者

米虫 正巳 (KOMEMUSHI, Masami)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：10283706

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：現代フランス現象学を統一的に捉える視座を獲得するために日仏共同研究を行なった結果、その不可欠な背景としてのハイデガー哲学の重要性が確認された。現代フランス現象学の可能性を捉えるためには、ハイデガーとの関係の中でそれを位置づけることが不可避である。ハイデガーとの対決的解明を通してこそ、現代フランス現象学のみならず、デリダ、ドゥルーズ、フーコーなど現代フランス哲学の様々な可能性も開かれてきたし、現在も開かれつつある。現代フランス現象学が前提としている西洋哲学史の伝統を再考することも、必然的にハイデガーとの関係を前提としなければならない。こうして哲学史上の諸々の概念について再考することも可能となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在も進行中の現代フランス現象学に関して、本格的な日仏間での共同研究が行なわれてこなかったというこれまでの研究状況への反省に基づく本研究の意義は、フランスで現象学運動を現在担いつつある研究者たちと共に共同研究を行なうことによって、その可能性を統一的に捉えることのできる視座を獲得し、それをもとにしてフランス現象学の過去の成果を捉え返すと共に、現代フランス現象学の観点から哲学上の重要な諸概念を再考する点に存する。

研究成果の概要(英文)：As a result of the Franco-Japanese joint Research on the French contemporary Phenomenology, it has been discovered that the Heidegger's philosophy is very important to get the unified view of the French Phenomenology's potential: it is impossible to understand it without connecting the phenomenological genealogy in French to the Heidegger as its background. Through their explicative confrontation with Heidegger, the French contemporary Philosophy, including the Phenomenology, is deployed. In light of its relation with Heidegger, it is possible to reconsider the history of Philosophy that the French Phenomenology implicates. That's the way we can rethink the philosophical concepts in its traditional history, on the basis of the French contemporary Phenomenology.

研究分野：哲学

キーワード：フランス現象学 ハイデガー デリダ ドゥルーズ フーコー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究開始に当たっての背景として挙げられるのは、哲学における日仏間での共同研究に関して、これまで或る種の偏りや欠落が見られたという事実である。17世紀哲学、例えばデカルトやライプニッツの哲学に関して、あるいは20世紀ではベルクソンやメルロ＝ポンティの哲学に関しては、日仏共同研究の蓄積がこれまでも存在している。しかしながら、現在もなお進行中の現代フランス現象学に関しては、日本でもフランスでもそれぞれ別個に研究は行なわれているものの、日仏間の共同研究はここまで存在しなかった。そのような現状を踏まえれば、現代フランス現象学に関して、フランスでその運動を担いつつある研究者たちと共に研究を行なうことが求められた。

2. 研究の目的

本研究は第一に、現代のフランスにおいて多様な仕方で展開しつつあるフランス現象学の可能性を統一的に捉えることのできる視座を、日本とフランスの研究者たちとの共同作業のもとに獲得することを目的とする。第二に、そうして得られた視座をもとに、フランス現象学の過去の成果を捉え返すと共に、現代フランス現象学が前提としている西洋哲学史の伝統を再考することで、現象学の背景にあるギリシア哲学やドイツ観念論などの哲学史的遺産に潜む豊かな可能性を、今日のフランス現象学を通して掘り起こすことを目的とする。第三に、こうした現代フランス現象学、及びそれと他の哲学的潮流との相互関係から、出来事、差異、世界、物、真理、感情、時間、主体、生命といった哲学の基本概念を再考することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するための研究方法は、現代フランス現象学における出来事、差異、世界、物、真理、感情、時間、主体、生命といった諸問題に取り組むフランスの研究者たちとの密接な連携による共同研究を三年間継続することである。以前から共同研究を行なってきた研究者と今回新たに加わった研究者も交え、初年度には研究の着手にあたって基礎となる問題の設定を行ない、今後の研究の方向性を確認した。二年目は研究成果の見通しを仮説的に立てるため、フランスから招いた研究者たちと共にシンポジウムや講演会などを開催し、日本の研究者も交えて議論を積み重ねた。最終年度にも、フランス及び日本の研究者たちと共にシンポジウムや講演会などを開催し、それまでの成果を発展させることに加えて、研究成果の全体を統一的な形で総合するよう試みた。

4. 研究成果

現代フランス現象学に関する日仏共同研究として得られた成果は以下の通りである。

(1)現代フランス現象学の可能性を統一的に捉えることのできる視座を獲得するために、日本とフランスの研究者たちとの共同作業をシンポジウムや講演会という形で行なった。またその前後にはそれぞれ数日間にわたる研究交流や打ち合わせを通じて議論を深めた。具体的には以下を開催することで共同研究を遂行した。

- 2017年4月20日にソルボンヌ大学教授のエマニュエル・カタン氏の講演会「Unwesen. Hegel et la chose」(「Unwesen — ヘーゲルと物」)を同志社大学で開催した。
- 2017年10月28日・29日にパリ西大学名誉教授のディディエ・フランク氏、ボルドー大学准教授のブリュス・ベゲー氏らフランス人研究者と日本人研究者など総勢9名で、国際シンポジウム「La phénoménologie et ses autres」(「現象学とその他者」)を同志社大学で開催した。
- 2018年6月11日にデポール大学教授のフレデリック・セレール氏らフランス人研究者と日本人研究者の総勢5名で、日本ミシェル・アンリ学会との共催による国際シンポジウム「Aspects de la pensée française contemporaine」(「現代フランス思想の諸相」)を関西学院大学で開催した。
- 2018年10月27日・28日にパリ西大学名誉教授のディディエ・フランク氏、パリ・フッサール文庫研究員のローラン・ヴィルヴィエイユ氏らフランス人研究者と日本人研究者の総勢6名で、国際シンポジウム「Heidegger dans la pensée française」(「フランス思想の中のハイデガー」)を同志社大学で開催した。
- 2018年11月1日にパリ西大学名誉教授のディディエ・フランク氏の講演会「Éternel retour et mémoire」(「永劫回帰と記憶」)を同志社大学で開催した。
- 2019年3月10日にパリ西大学名誉教授のディディエ・フランク氏、ソルボンヌ大学講師のヴァンサン・ブランシェ氏らフランス人研究者と日本人研究者の総勢5名で、国際シンポジウム「Jacques Derrida dans la phénoménologie」(「ジャック・デリダと現象学」)を開催した。

その結果、現代フランス現象学の多様な広がりが明確にされると共に、その不可欠な背景としてのハイデガー哲学の重要性が確認された。言い換えればそれは、現代フランス現象学の可能性を統一的に捉えるためには、ハイデガーとの関係の中でそれを位置づけることが不可欠だということであり、ハイデガーとの同一性と差異を正確に測定することが不可欠だということである。

(2)ハイデガーとの対決的解明を通してこそ、現代フランス現象学の様々な可能性も開かれてきたし、現在も開かれつつある。そして現代フランス現象学が前提としている西洋哲学史の伝統を再考することも、必然的にハイデガーとの関係を前提としなければならないことになる。フランス現象学の背景にあるギリシア哲学やカント哲学、ヘーゲルやシェリングらドイツ観念論の哲学的遺産に潜む豊かな可能性も、ハイデガーとの関係を通してこそより明確に理解できるようになるからである。そのことはまた、ハイデガーとの直接の関わりを経由したレヴィナス、アンリ、ボーフレなどフランス現象学の系譜の第一世代の哲学者たちにとってだけではなく、やはりハイデガーとの対決をくぐり抜けてきた次の世代に属すデリダ、あるいは必ずしも現象学の系譜に属すのではないが紛れもなくハイデガーの影響下にある哲学者たち、例えば、ドゥルーズ、フーコー、ドゥサンティなどの現代フランス哲学を代表していた哲学者たちにも妥当することである。

(3)こうした現代フランス現象学、及びそれと他の哲学的潮流との相互関係から、哲学史上の諸々の概念について再考することが可能となる。例えば出来事は現代フランス現象学においてもっとも重要なテーマの一つであるが、ハイデガー/ドゥルーズ/デリダ/アンリの交差する地点からそれを捉え直すことによって、この概念を現代フランス現象学の文脈であらためて考えることが必要となる。このことは他のテーマに関しても同様であり、物と世界の関係を存在と存在者の区別以前のところで捉えることで、時間と場所という基本的な概念についても再考が可能となろう。気分や雰囲気に関する最近のフランス現象学の成果からも、同じことが感情や主体性という基本概念についても言えるが、いずれにせよそこにはハイデガーとの対決的解明の作業が避けて通れないものとしてある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

米虫正巳、「『生命とは何か?』という問いに対して哲学が語ることのできる若干の事柄」、『哲學』第70号、日本哲学会、73-90頁、2019年

〔学会発表〕(計 5 件)

Masami Komemushi, « Plus ou moins qu'un. Derrida et Heidegger », Colloque international « Jacques Derrida dans la phénoménologie », organisé par Didier Franck, Vincent Giraud, Yukihiro Hattori et Masami Komemushi, 同志社大学(京都府京都市), 2019年3月10日

Masami Komemushi, « Penser la finitude (im)pensable. Foucault et Heidegger », Colloque international « Heidegger dans la pensée française », organisé par Didier Franck, Vincent Giraud, Yukihiro Hattori et Masami Komemushi, 同志社大学(京都府京都市), 2018年10月28日

米虫正巳、「『生命とは何か?』という問いに対して哲学が語ることのできる若干の事柄」, 日本哲学会学協会シンポジウム、神戸大学(兵庫県神戸市), 2018年5月20日

Masami Komemushi, « Reporter la différence. Déplier le pli de Deleuze/Heidegger », Colloque international « La phénoménologie et ses autres », organisé par Didier Franck, Vincent Giraud, Yukihiro Hattori et Masami Komemushi, 同志社大学(京都府京都市), 2017年10月28日

Masami Komemushi, « Venir en soi-même. De l'ontologie de la subjectivité à la phénoménologie de l'événement », 日本ミシェル・アンリ哲学会特別シンポジウム、立命館大学(京都府京都市), 2016年12月17日

〔図書〕(計 2 件)

上野修・米虫正巳・近藤和敬編著、『主体の論理・概念の倫理 — 二〇世紀フランスのエピステモロジーとスピノザ主義』、以文社、2017年、263-288頁、291-296頁、365-396頁

米虫正巳編著、『フランス現象学の現在』、法政大学出版局、2016年、iii-xi頁、259-293頁、322-331頁

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等 なし

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。